

突然連れてこられたキスクだが、大国というだけあって、そうファルサスと差があるわけではない、と雫は思っている。

「思ってるんだけど、なんか言ったら睨まれそうな空気なんだよねー。あとやっぱりファルサスの方が、魔法に關しては上な気がする。性能もいいし、あちこちに置かれてるし」

「睨まれそう、とまで分かっているのにどうして俺に言うんだ？ 馬鹿か」

同僚であるニケの嫌味に、雫は「共通の話題がないからかな」と率直に返した。たまたま重なった休憩時間にお茶を飲んでいる二人は生産性のない応酬を重ねている。ニケは、雫が焼いてきた菓子を摘まむ。

「さすがにファルサスと一緒にするな。あの国は蓄積してきた魔法技術が違うんだ。大体、あそこの王族は上位魔族を使役してる。この時代にそんなのがいるのは、ファルサスくらいだ」

「あー、エリクに聞いたことがある。なんだっけ——」  
雫は言いながら記憶を探る。エリクから聞いたこの国の歴史は膨大だ。ノートを取っていることも多いが、今はそれも自室だ。

だから彼女は自分の記憶を頼りに、『精霊』と言われるファルサスの上位魔族について口にする。

「あれだよ。当時の魔法大国の女王様がファルサスに

連れてきたってやつ」

「……お前、変わった言い方するな。合っているとさえば合ってるが」

「え、合ってるよね」

ファルサスの隣国であったトゥルダール。十二の絵師例はもともと、その女王が使役していたものなのだ。ファルサスが現在魔法大国になっているのも、彼女に負うところが大きい、という話だったはずだ。あまり突き詰められると自信がなくなってくるが。

「私が一緒にいた魔族の子も、上位魔族に仕えてたんだよ。ネビス湖から一緒に来たの」

「ネビス湖？ まさか、ネビス湖の水神か？」

「そうそう。やっぱり有名な話なんだ？」

「……実在する話とは思ってなかった。なんでお前はそんな話に縁があるんだ」

「私からすると、この世界は今も昔も全部ファンタジーなんだけどね……」

現地に生きているニケにとっても、眉唾な話というものはあるらしい。雫はお茶のみながら、異世界の歴史に思いをはせる。

※

「ティナーシャ様、本当に私たちごとファルサスに嫁入りでいいのー？」

精霊のミラに問われて、執務机に向かっていたティナーシャは顔を上げる。お茶を淹れてくれている赤髪の少女は、以前はトゥルダールの精霊であったが、ティナー

シャの退位と共に彼女個人の使役魔族になることが決まっている。だが、暗黒時代には地方で神とも扱われることがあった上位魔族だ。それを十二体も他国に持ちこんでいいのかと問うミラに、ティナーシャは微笑んだ。

「オスカーがいいって言ってますから。それに、貴方たちはどう動いてもらうかは私の采配ですからね。それに関しては口出しさせません。第一、そこを問題視するなら私が嫁ぐことが既に問題です」

「そっか。そうだよ。ティナーシャ様が攻国兵器だもんね」

「そう言われるとなんか反論したくなるんですけど、まあそうですね」

「せっかくだから乗っ取っちゃおう？ 子供を産んだ後、アカーシアをどこかに捨ててくればいけるよ？」

「それ、あの人が生きているうちは多分無理ですからね。確実に個人対国の戦争になりますよ」

「えー、勝つ自信あるよ？」

精霊が自信満々なのはいいが、国を乗っ取るために結婚するのではなく、彼のが好きだから結婚するのだ。

「そりゃ、喧嘩……くらいはするかもしれませんが。実力行使も……多少はあるかな……。でもあの人がアカーシアを持ってたら勝てませんからね……隙を見て捨ててこないと」

「やっぱりそうなる？」

「しませんけどね！」

結婚の日まではあと少し。それを待つ時間さえ、今のティナーシャには嬉しいものだった。